

当院看護師・^{むらずみ}村住さん

バングラデシュ南部避難民救護事業より帰還！！

この度当院手術室看護師の村住さんが日本赤十字社緊急医療チームの第5班としてバングラデシュ南部避難民救護事業に参加されました。ではここでその活動の一部をご紹介します。

～バングラ南部避難民救護事業とは～

2017年8月25日、ミャンマーとバングラデシュの国境付近での武力衝突が発生、ミャンマーに済む人々が隣国のバングラデシュ南部へ流入し避難民となりました。バングラデシュ赤新月社（イスラム圏の赤十字社）は避難してきた人々の救援活動を開始。国際赤十字・赤新月社連盟は各国に緊急医療チームの派遣を指示しました。



～村住さんの第5班～

村住さんは日本赤十字社緊急医療チームの第5班として活動されました。第5班の活動方針は緊急医療支援を終結し、中長期支援に向けての準備を行いバングラデシュ赤新月社主体の活動に切り替えることだったそうです。

ほとんどが野外トイレで生活用水とともに汚水として家々の間に流れ、水たまりになり、蚊やハエが大量発生するなど、いまだ不衛生な環境による健康被害が多く存在するため、それに対応する「保健衛生プログラム」進めるのが目的です。



むらずみ
ですよ～！

～第5班メンバーをご紹介します～

5班は日本人スタッフ25名、バングラデシュスタッフ15名、ミャンマーからの避難民（コミュニティボランティア）50名の総勢90名近いスタッフで診療所の運営を行ったそうです。ミャンマーからの避難民の方はもともと学校の先生や通訳をされていた方などが多く、みなさんとても穏やかでまじめな方達だったとのこと。7ヶ月前の武力衝突で自分の家族が殺された方もいたそうです。





～過酷な活動～

活動の中にはジフテリア患者の家族にお薬を届ける仕事もある。患者の家は、はっきりした住所もないため、炎天下の中まわりの住民に聞きながら、何時間もかけてたどり着くのだそう。毎回熱中症の手前になり頭痛や吐き気をもよおすほど、大変な労力と時間必要とする活動であったようです。しかしこの地道な作業が感染の拡大を食い止めていると思うと、とてもやりがいがあったと言っておられました。



～村住さんの現地生活～

村住さん達は診療所近くのキャンプサイトに宿泊していたそうです。テントの中は2畳ほどで、隙間から大量の蚊が入ってきて息をすると口に入るほどだったとか！寝ているとネズミが体の上を走っていくことも！もともと野生の象が生息しているところで以前に一度キャンプサイトに入ってきたこともあったとか。

食事はほとんど毎日がスパイシーカレー、日本食がすぐに恋しくなったそうです。

～村住さんのおもい～

今なお増え続ける難民問題、明るい未来を想像できる状況ではないと思ったそうです。実際に自分の家族が殺され、死ぬ思いをしてバングラデシュに逃げてきた人々と一緒に働いて、生活を共にし、世界中の援助で生活している今の現状をまのあたりにし、いま世界が、また日本赤十字が、そして自分に何ができるのかを考えて行かなければと痛感したと力強くお話ししてくれました。



世界で活躍する職員が院内にいることは職員全員の誇りです。この赤十字精神は後輩へと引き継がれていくことでしょう！これからも当院職員の活躍にご期待下さい。